

Title	日本語シンタクス序論
Author(s)	寺村, 秀夫
Citation	大阪外国語大学学報. 16 p.283-p.303
Issue Date	1966-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80267
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語シンタクス序論

寺 村 秀 夫

A Transformational Approach to Japanese Syntax

Hideo Teramura

This paper intends to discuss a possibility of describing the Japanese grammar in terms of a set of elementary sentences and transformational rules which operate on them.

This will necessarily lead to proposing some revisions of the traditional word classifications, but the morphological analysis or classification is not so much the central concern here as the description of sentence structures with these classes of morphemes as the syntactic units, although in the description of such a language as Japanese, morphological problems sometimes do have syntactic significances.

The idea of 'transformaton' or 'discourse analysis' is not entirely new among Japanese grammarians. Daizaburo Matusita, for instance, in 1930 discussed the grammatical relationship between the sentence, "Watasi ga rizi desu." and the sentence, "Rizi wa watasi desu," thereby trying to account for the functional difference between *wa* and *ga*. (See § 3. 2. T-8) Among the recent grammarians perhaps Akira Mikami is best known for his conscious manipulation of transformation as an analytic technique. However, 'transformation' has not been conceived of as more than 'a convenient tool' to account for similarities or differences between sentences, or phrases or words. It is only since Zelig S. Harris and Noam Chomsky that the idea of grammatical transformation has become an integral part of linguistic theory.

For the past few years several attempts have been made to describe the Japanese language systematically with the methodological basis on the theory developed by the above two, and the present paper is one of them. Needless to say, this is by no means an exhaustive

description of the Japanese grammar. It merely shows a sketch of the Japanese syntax in terms of some kernel sentences (§ 2), and transformational rules which, operating on the kernels, generate various types of natural utterances (§ 3). The central idea here is the 'creative process' (Bergson-Chomsky) of the Japanese sentences, and from this angle, it is hoped, some new light will be shed on the analysis of sentence structures and word classifications. Much, however, has been left for further work.

ま え お き

所謂構造主義の言語学（或いは記述言語学）は、いうまでもなく伝統文法に対するアンチテーゼとして生まれた。「伝統文法」とは何を指しているのか問題であるとはいえ、ともあれそれは、次のような明確な批判的指導原理をもっていた。

(1) 規範的態度に対して客観的記述的態度をとること。(2) 各言語はそれぞれ固有の system を持っているのだから、或る言語の記述に当っては、自国語又は古典語等の知識から来る先入観に影響されることを極力避けねばならない。（従って ‘universal grammar’ という考え方には否定的である。）(3) 「意味」を分析、分類、記述のより所とせず、「カタチ」を第一の拠り所とすること。(4) 共時的観察と通時的観察を峻別すること。

このような構造主義の立場から、はじめて日本語の体系的研究に手をつけたのは Yale 大学の Bernard Bloch で⁽¹⁾、彼の構想はその後 Samuel E. Martin, Eleanor H. Jordan らによって発展させられた。Jordan の *The Syntax of Modern Colloquial Japanese*⁽²⁾ は、Structuralism の主要な武器とする所謂 IC 分析の到達し得る一つの限界を示している。彼らの構造主義からする日本語の体系づけは、今日アメリカにおける日本語教育の主な理論的基礎をなすものである。

さて、こうして1930年代から次第にアメリカ言語学界の主流にまで発展するに至った Structuralism にも、やがてその方法に限界が感じられるようになった。その音素（phoneme）分析の方法は、その引きうつしともいえる形態素（morpheme）分析と共に構造主義の輝かしい成果であったが、Syntax の面に於ては殆んど見るべきものがなかったといっても言い過ぎではなからう。つまり伝統文法を‘克服’すべく、IC分析（又は ‘phrase structure grammar’）は余りに貧弱であった、ということになる。

Pennsylvania 大学の Zelig S. Harris 及び Noam Chomsky（現在 M. I. T. ）を代表とする Transformational grammar（又は Generative grammar, Harris は ‘Formal linguistics’ という言葉も使う）は、上に述べた構造主義の行きづまりを背景として理解されねばならない。

Chomsky らの主張は大要次のようである。

(1) 構造主義は、prescriptive に対して descriptive であろうとする余り、ただ、在る data

(1) 彼は “Studies in Colloquial Japanese” をシリーズとして、1946年から1950年までの間に *JOAS* 及 *Language* に発表した。

(1) Yale Univ., Ph. D. Dissertation, (Language Supplement) 1955.

（‘corpus’）の分析、分類、整理（‘inventory’）に終始しており、native speaker が、それまでに耳にした有限の発話をもととして無限の grammatical な発話を生み出して行く間の消息を説明し得ない。言語理論は、言語の ‘creative process’（ベルグソン）を明確に定式化する力を持たねばならない。(2)各言語の特殊性を認識する事は勿論大切だが、それら特殊性のうちに潜む普遍的な法則 ‘linguistic universal’ の考察は言語理論の当然の使命である。（この点むしろ伝統文法との近似を感じさせる。）⁽³⁾(3)構造主義は常に、与えられた corpus から帰納してそこに regularity を見出して行こうとするが、変形理論ではむしろ重点を、どのような公理・定理の体系を立てれば現実の多様な発話の生み出されるプロセスが演繹出来るか、に置く。(4) 構造主義では一般に、phonology—morphology—syntax の各レベルを一応他と独立の完結した system として記述し得るし又すべきだとするが、これらはむしろ言語全体の体系の中で位置づけられるべきものである。つまり Harris らは、いわば morphological な考慮が phoneme の体系を立てる際に介入して来るのを当然であるとするわけだが、これは、syntax のレベルに於て、どのような基本文を設定するかは、transformational rules との組合せにおいて、どうすれば ‘全体として’ その言語を記述出来るかによってきまる、という考え方に通ずる。これに就ては後に再び触れる。

本稿は、以上簡単に見たような構造主義の文法への反省・批判から出発し、Harris-Chomsky の方法論に示唆を得て、一つの新たな視点から日本語の syntactic な構造の outline を記述しようとする試みである。従来、国語学で、上述のようにいわば文を ‘産み出す’ 観点から文法を考えたものに松下一佐久間一三上の系譜があるが、総じて我国に於ても文法学は歴史的研究に比重が置かれ、現代語に於ても Item の分類、一つ一つの（文から切り離された）Item の用法、意味の列記が大部分を占めているように思われる。併しそれら ‘伝統的’ 文法学説、又、Jordan, Martin らの所説の吟味・批判は本稿の主題ではない。又一口に Harris—Chomsky といっても、両者の構想は同じではないし、所謂 Pennsylvania の学派と MIT 学派とが夫々独自の発展をなしつつある現在、変形理論といっても一律に論じられない事は勿論である。⁽⁴⁾ が本稿ではそのことも、

(3) 尤も、Chomskyは ‘Substantive universals’ と ‘Formal universals’ とを区別し、前者を ‘vocabulary for the description’（即ち品詞とかその他の文法範疇を表わす言葉）に関するもの、後者を ‘the character of the rules that appear in grammars and the ways in which they can be interconnected’ に関するもの、とし、伝統文法に対し Generative grammar としてはむしろ後者に関心をもつもの、としている。（Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, 1965, p.27以下）

(4) 近時、我國に於ても、アメリカに於ても、Generative grammar による日本語の分析が各地で発表されつつある。単行の書物では Bachの *An Introduction to Transformational grammars* (1964) が日本

それ自体としては問題としない。

本稿では、先ず syntactic な単位たる形態素⁽⁵⁾の体系 (§1)、次にそれら形態素の一定の連鎖より成る日本語の中核文 (‘kernel sentence’, 又は基本文 ‘elementary sentence’) の類型 (§2)、そして最後に、一定の構造をもった中核文に適用されて様々な現実の発話を作り出す変形の諸ルール (§3)、という順で考えて行きたい。

§2で中核文の構造 (‘phrase structure’) を記述するのに、一般になされているように文 (とその構成成分) を、‘rewriting rules’ で順々に展開して行くという形式はとらなかった。紙面の都合もあるが、中核文の類型がどうであるか、どの類型にどの変形ルールが働くかが目下の関心事である為である。

文字どおり「序論」に過ぎないが、多少とも、従来の国文法、或いは直接構成要素分析では明らかにならない、又は誤っていると思われる点をこういうアプローチから考え直して行きたいというわけである。

§1. 日本語の形態素のクラス

1.1. Syntactic な単位が何か、という事は、実は大変大きな問題であるが、ここではとりあえず、本稿で何故 morpheme を構成の単位としてとりあげるかを簡単に述べたい。

Bloomfield の古典的な定義以来、Word というものを手がかりとして文法を Morphology と Syntax の二段構えとする事が近代言語学でも通例となっている。然し、実は「語」とは何か、ということほど厄介な問題はないので、厳密を期して多角的な定義で押えようとすればするほどお互いの間に矛盾が生じて来る。伝統文法に於ても、又、一般人の常識からしても、最も基礎的な文法の単位として常に assume されて来たにも拘らず、である。

特に Rulon S, Wells や Bloch のように⁽⁶⁾、IC 分析に於て「或る sequence を2つの IC に分割する時、その片方が語の集合 (phrase) であって他の片方が bound form である事はない」というような原則を立てるならば、現実の言語の分析に於て無理な IC 分析をしなければ

語の例を数ヶ所挙げていますが、これも体系的に全体を記述したものではない。

(5) ‘morpheme’ は「意味を担う最小単位」という意味では「意味素」とでも訳したいが、既に「意義素」という言葉が‘Sememe’の意味で服部博士によって使われているので、ここではやはり訳語として「形態素」というのをとった。

(6) Bloch, 1946. 1.2. 彼はその定式化を Wells に負うといっているが同じような事は Bloomfield, *Language*. p.184にも見える。

ばならなくなる事が当然予想される。

日本語の文法に於ても、「語」の定義をめぐる様々な努力がなされたが、それらは大要次の三つの考え方に整理されよう。

(1) Bloomfield の ‘minimum free form’ という考え方に立つもの。(服部博士は附属語と附属形式を見分ける三つの原則を示している。)⁽⁷⁾(2) 単語を「思想の最小単位」とするもの(山田孝雄⁽⁸⁾ら。尚、松下大三郎の「詞」の説明もこれに近い。)(3) 音声的特徴を認定の基準にするもの(橋本進吉博士の文→文節→単語というプロセス、又、Bloch の ‘facultative pause’ という考え方。)(4) 時枝誠記博士は、語とは「心的内容を音声又は文字にまで表現する過程」が「一回的過程として成立した場合に経験される所のものである」⁽⁹⁾ と考え、そして素材の表現に於て、「概念過程」を含むか否かを以て「詞」と「辞」の分類の基礎とした。

時枝博士の「詞・辞」という対立概念は、syntactic にも重要な意義をもつものであるが、それ故にいっそう、すべての語を詞か辞のいずれかに分類されるべきものとする事は、三上章氏も批判するように、何か素直な分析からは納得出来ないような結果を生ずることになる。次節に、活用語の class につきその語幹とそれぞれの活用語尾を表示したが、私はこの語幹、例えば「降ル」なら “hur-” を時枝的考え方という詞と見、“-u” は断定、即ち一つの「主体的規定」を表わす辞と見ればよい、と思う。そうすれば例の「零記号の陳述」といった不自然な表現もとらずにすむと考える。従って例えば、「雨ガ降ル」、「雨ガ降ロウ」、「雨ガ降レ」は、それぞれ ‘ame ga hur/u’; ‘ame ga hur/oo’; ‘ame ga hur/e’ となり、それらすべてについて ‘ame ga hur-’ が時枝式表現をかりれば、「言語主体に対立する客体界の表現」であり、“-u”、“-oo”、“-e” などが「言語主体の判断又は種々な立場」を表現するものと考えるのが妥当ではないかと思う。もしここで IC cut をするとすれば、斜線が第 1 cut の位置を示すことになる。つまり “-u”、“-oo” などの bound form がいわば syntactic な function を担っている事になる。私は、Rulon S. Wells のように、「言語を記述するに当って格別矛盾や複雑化のもととなるというのでなければ」語というものを構文単位とみなす事は確かに便利であると⁽¹⁰⁾思うが、当面日本語の記述に当っては、Harris のように、⁽¹¹⁾ morpheme とその sequence から直接発話の構成分析へと進む方

(7) 服部 四郎「附属語と附属形式」—「言語学の方法」所収

(8) 山田 孝雄「日本文法論」p.46

(9) 時枝 誠記「国語学原論」pp.222~3

(10) Rulon S. Wells, ‘Immediate Constituents’ *Language* 23.81—117 §45

(11) Zelig S. Harris, ‘From Morpheme to Utterance’ *Language* 22.161—83

がよく, morphology と syntax との分立は必要ではないと考える。

1.2. さて, 日本語の Morpheme class は, 次のとおりである。以下の記述で例えば X-は Xが後に向って bound であることを, -X は前に向って bound である (つまりふつうの発話では必ず何らか他の morpheme に付いて現われる) ことを示す。記号 ∞ はその前後の morph が互いに所謂 allomorph である事を示す。

1.V- これは, この Stem が子音で終るもの (kak-, oyog-, yob-, yom-, tat-, hanas-, tor-, kaw-など) (“第Ⅰグループ”) と母音で終るもの (tabe-, oti-など) (“第Ⅱグループ”) とに 2 大別され, 更に第Ⅲのグループとして不規則動詞 suru, kuru の 2 つがある。

これは次のような活用のパターンをもつ。

(第ⅠグループをⅠ, 第ⅡグループをⅡとして併記する。第Ⅲグループは省いた。)

	非 完 了 (Imperfect)	完 了 (perfect)
直 説 形 (Indicative)	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -u -ru	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -ta
推 量 形 (presumptive)	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -oo -yoo	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -taroo
命 令 形 (Imperative)	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -e -ro	
連 結 形 (Conjunctive) 又は Participial	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -i -φ	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -te
条 件 形 (Conditional)	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -eba -reba	$\begin{Bmatrix} \text{Ⅰ} \\ \text{Ⅱ} \end{Bmatrix}$ -tara

第Ⅰグループの場合, 非完了が完了になる際 Stem に或る sound change が起る。そこで三上氏のように, すべての動詞について「単純語幹」(例えば kak-) と「完了語幹」(例えば kait-) という 2 つの語幹を認める考え方も出て来る。⁽¹²⁾ 併し, この sound change は規則的で予見可能である </k/, /g/→/i/—このうち ik—だけは it(ta) となり例外—/b/, /m/→/ñ/, /t/, /r/, /w/→/t/, /s/—→/si/) から, Item and Process (‘IP’) 式に考えれば語幹を 1 つとし, 完了語尾がつく場合の音変化を morphophonemic に考えればよいことだと思う。

尚, 「～タリ」という形は, 入れるとすれば, 完了の連結形に入れるべきだろうが, 今の所その欄は -te 1 つにしておきたい。

(12) 三上章「現代語法序説」

2. A- (所謂「イ形容詞」の語幹)

次のような活用のパターンをもつ。

	非 完 了	完 了
直 説 形	-i	-katta
推 量 形	-karoo	-kattaroo
連 結 形	-ku	-kute
条 件 形	-kereba	-kattara

3. Cop- (所謂「繫辞」)

N 又は Na (後述) に付いて文を成立させる。それ自身は、次の活用のパターンをもつ。「ダ」だけを示す。

	非 完 了	完 了
直 説 形	(d)-a	(dat)ta
推 量 形	(d)-aroo	(dat)taroo
命 令 形	(de-are)	
連 結 形	(d)-e (ni)	
条 件 形	nara	(dat) tara

4. Na- (所謂形容動詞の語幹) 名詞的な面と形容詞的な面とをもっているので使宜上このように表記する。その活用は Cop- の活用表で示される。N に前置されて attributive に使われるときは非完了・直説形の場合 '-da' が '-na' となる。

5. N (「名詞」)

6. -A-

常に他のクラスの形態素に後接する bound morpheme でそれ自身は A- と同じ、又はほぼ同じ活用のパターンを持つ。従来は「(行キ) タイ」も、「(行カ) セル」なども一括して「助動詞」と呼ばれているが、私は、それらが英語などの「助動詞」が動詞に常に従属したものであるのと異ること、又「～タイ」、「～レル」、「サセル」等は、それ自身が活用するさまは形容詞

や動詞と何ら異なる所がない，という特性から考えて，「助動詞」という呼び方で一括することは正しくないと思う。「行カナイ」の「ナイ」が，「本ガナイ」の「ナイ」と違うという点は，後者をA，前者を-Aで表わせれば足りる。尤も，「ナイ」はふつうのAとはやや違った活用の-m（後述）がつく。-na- ∞ -ana- の活用は，次のようである。

	非 完 了	完 了
直 説 形	-(a)na-i	-(a)na-katta
推 量 形	-(a)na-karoo	-(a)na-kattaroo
連 結 形	{-(a)na-ku {-(a)zu(ni)}	{-(a)na-kute {-(a)na-ide
条 件 形	-(a)na-kereba	-(a)na-kattara

これはV-の Stem に，A- と Cop- には，その非完了連結形の活用語尾の後に付く。

「タイ」は，V-の非完了連結形の語尾のついた後に続く。（必ずV-に付く場合-vA-と表記することがある。）

7. -V-

他の形態素に後接する bound morpheme で，それ自身はV-と同じ活用のパターンをもつ。

-are (ru) ∞ -rare (ru) (-vV-)

-ase (ru) ∞ -sase (ru) (-vV)

-e (ru) ∞ -rare (ru) ∞ -deki (ru) (「可能」を表わす形態素) (-vV)

8. -m

上述，V-，A-，Cop- などですれらにつづく活用のパターンを示したが，それら活用語尾の形態素は '-m' で表記する。従って V-m はV-が何らかの活用語尾 ('modal suffix') が付いている，ということを示す。特に直説形・命令形などを示したい場合は {直}，{命} などと略記することがある。

9. D (いわゆる副詞)

10. Att (いわゆる連体詞)

11. P (いわゆる助詞)

このうち「ガ，ノ，ニ，ヲ」などをPcと別記することもある。

12. C (いわゆる接続詞)

§ 2. 日 本 語 の 中 核 文

2. 1. 林四郎氏は、興水実氏らの指摘を紹介しながら、基本文型といわれる時の「基本」の意味について、少くとも次の5種の考え方がある、としている。⁽¹³⁾

- (1) 統計上——使用頻度が高い。
- (2) 学習上——習得し易い。
- (3) 理論・思索上——命題敘述の根本をなす。
- (4) 政策上——統一の根拠をもつ。
- (5) 経済上——特定環境下での効率を増す。

併し、文法体系の中に基本文型というものを設定するとすれば、それは少くとも(1)、(2)や(4)などではあり得ないと私は思う。(5)について林氏は、「例えば翻訳機械にのせやすい文章を作るといような、特定の条件のもとで作文する場合は、出来上った文章が、一般の人に分り易いかどうかという事は度外視され、機械が用意している所定の文型に当てはめることだけが考えられる」と、述べているが、それは翻訳機械について必然的なことではないと思われるので、それについて違った見方に立てば、この(5)に分類されている考え方は重要なものであると思う。

「文法理論として」考えるならば、やはり(3)のような見地から「基本」という意味を考えるべきだと思うが、「命題敘述の根本をなす」という基準では、主観の違いによって幾つも違った考え方が出てきそうである。

私は根本的には「基本文」の設定には哲学的な基礎づけは必ずしも必要でないという立場であるが、理論づけをするとすれば、時枝博士の「詞」と「辞」の対立、三上氏の「コト」と「ムウド」という考え方などに興味を覚える。三上氏の表現は Charles Bally の 'dictum' と 'modus' という二元的考えに由来するが、Bally が、現実の発話の分析に当って、先に § 1.1 で一寸触れたような時枝博士の「詞」と「辞」二分説と同じ弱点をもっているのに対し、三上氏は哲学的基礎づけは Bally から借りているものの、実際に包懐する所はもっと純然たる syntactic な考えではないかと推測される。提題の「ハ」を「ガ」、「ノ」等からみちびき出す発想は、現在 trans-formation で日本語を記述しようとする人々すべてにヒントを与えたものである。

ともあれ、基本文というものは、どのような基本文の類型を立て、どのような変形ルールがそれに加えられると考えれば現実の多様な文を最も簡潔に、しかも意味から考えても納得のいくように定式化する事が出来るか、という見地から考えるべきものだと思う。

(13) 林四郎「基本文型の研究」(1960)第一章

次節に記す基本文はまだ不確定なものであるが、今後、変形ルールを更に色々と考えて行きながら修正を加えて行きたいと思っている。

2.2. 先に1.1.でも一寸書いたように、私は時枝博士の「詞」的要素、三上-Bally の‘dictum’ という考え方からしても、日本語の中核文は、「N+格助詞+述語 (A, V, 又はN+Cop) の語幹」と考えるのがよいと思う。それはまだ現実の発話となる以前の、その意味で「中核」となる文であって、それに様々の‘-m’ が付き、或いは更にそれが transform してはじめて現実の発話となるのである。日本語では、形容詞や動詞や「ダ」の活用形（非完了及び完了の連結形）が英語などの接続詞に相当する働きをするが、そういう事も上のように基本文を立てる事によって説明し易い。

以下に日本語の Elementary Sentence を列記する。交換可能、不能を示す記号は省く。

- [E.1] Nガ N+Cop- 「コレガ真実 (ダ)」
- [E.2] Nガ Na+Cop- 「外ガ静カ (ダ)」
- [E.3] Nガ A- 「花ビラガ美シ (イ)」
- [E.4] Nガ Vi- 「雨ガ降 (ル)」
- [E.5] Nニ Nガ $\begin{cases} \text{Vi-} & \text{「彼ニ財産ガア (ル)」} \\ \text{A-} & \text{「彼ニ子供ガナ (イ)」} \\ \text{Na+Cop-} & \text{「彼ニ何ガ必要 (ダ)?」} \end{cases}$
- [E.6] Nガ $\begin{cases} \text{Nヲ} \\ \text{Nニ} \end{cases}$ Vt-
「彼ガ彼女ヲ殺 (ス)」
「共産党ガソノ案ニ反対 (スル)」
- [E.7] Nガ Nニ Nヲ Vt- 「彼ガ母ニ手紙ヲ書 (ク)」

§ 3. 変 形 の ル ー ル

3.1. 次は前述の基本文に働いて様々の現実の発話を生み出す所謂 Transformation のルールを考える。色々な分類の仕方が可能だが、ここでは一応次の5つの類型に大別する。

A) 付加 (addition) ……基本文 (Elementary Sentence 又は以下単に ‘S’ 又は ‘S-’) に (文でない) 他の要素が付加されて1つのSを作るもの。

B) 除去 (Deletion) ……文字どおり、一定の条件のもとに S のうちの或る部分が消去されるもの。

C) 単一変形 (Unary Transformation) ……広い意味では (A), (B) も次の (D) も unary 変形というべきであろうが、ここでは、単一の完全な S の、その中の要素が入れ替ったり、P が変ったりして他の構造の S が出てくるもの。

D) 文の Phrare 化 (Deformation) ……S に働いて non-S を作り出すもの。

E) 複合変形 (Binary or Polinary Transformation) ……素となる S が 2 つ或はそれ以上でそれらの変形・結合によって 1 つの S が出来るもの。

3.2. 上の分類に従い乍ら Transformation の rule を具体的に記す事にする。

(A) 付 加

〔T.1〕 確言文を作る。

§ 2.2. に挙げた E.1~E.7 の V-, A-, Cop-などを一括して Predicate- で表わす。

……Predicate- → ……Predicate {直説}

〔T.2〕 推量文を作る。

……Predicate- → Predicate {推}

〔T.2〕 命令文を作る。

……Predicate- → Predicate {命}

〔T.3〕 否定文を作る。

……V-m → ……V-{-ana-∞-na-}-m

はじめの V- に付いている mood, tense の -m がそのまま右に移行する。

「雨が降ル」 → 「雨が降ラナイ」

「雨が降ッタ」 → 「雨が降ラナカッタ」

(「雨が降レバ」 → 「雨が降ラナケレバ」)

以下についても同じ。

$$\left. \begin{array}{l} \text{……A-m} \\ \text{……N} \\ \text{……Na} \end{array} \right\} + \text{Cop-m} \left. \right\} \longrightarrow \left. \begin{array}{l} \text{A-} \\ \text{N} \\ \text{Na} \end{array} \right\} + \text{Cop-} \left. \right\} + \{ \text{連} \} + / \text{na} / - \text{m}$$

〔T.4〕 禁止文を作る。

……V- → ……V- {直} + /na/

(例) 「……走r-」 → 「……走runa.」

〔T.5〕 状態の表現をつくる。

……V- → ……V- 完了・連} + /iru/

〔T.6〕 疑問文をつくる。

$$\begin{array}{l} \left. \begin{array}{l} \dots\dots V- \\ \dots\dots A- \end{array} \right\} \longrightarrow \left. \begin{array}{l} \dots V- \\ \dots A- \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \left. \right\} +/ka/ \\ \\ \left. \begin{array}{l} \dots\dots N \\ \dots\dots Na- \end{array} \right\} +\text{Cop} \longrightarrow \left. \begin{array}{l} \dots\dots N \\ \dots\dots Na- \end{array} \right\} +/ka/ \end{array}$$

以上の他,丁寧体を作るプロセスもこの項で説明し得ると思われるが, Style の問題は他に色々な問題を含むのでここでは一応見送る。

(B) 除 去

日本語は, 白石大二氏らのくわしい観察もあるように, 著しく「場」に依存する言語であるから, 場によって speaker-hearer に了解されていることは省かれるのがむしろ普通である。どうした場合にどのエレメントが省かれるかは併しかなり注意深く定式化する必要があるが, ここでは紙面がないので省くことにする。

(C) 単一変形

〔T.7〕 題目の提示 (Topic transformation)

(a) Nガ……Predicate-m \longrightarrow Nハ……Predicate-m

(b) ……Nヲ……Nt-m \longrightarrow Nハ……Vt-m

(c) $N_1 \text{ノ} N_2 \text{ガ} \left\{ \begin{array}{l} A-m \\ Na + \text{Cop-m} \end{array} \right\} \longrightarrow N_1 \text{ハ} \quad N_2 \text{ガ} \left\{ \begin{array}{l} A-m \\ Na + \text{Cop-m} \end{array} \right\}$

(例) 「象ノ鼻ガ長イ」 \longrightarrow 「象ハ鼻ガ長イ」

(d) $N_1 \text{ニ} N_2 \text{ガ Predicate-m (E.5)} \longrightarrow N_1 \text{ハ} N_2 \text{ガ} \dots\dots \text{Predicate-m}$

(例) 「彼ニ妻ガアル」 \rightarrow 「彼ハ妻ガアル」

「彼ニ何ガデキル？」 \rightarrow 「彼ハ何ガデキル？」

「日本ニ人口ガ多イ」 \rightarrow 「日本ハ人口ガ多イ」

〔T.8〕 主語択一から述語択一へ

$N_1 \text{ガ} N_2 + \text{Cop-m} \longrightarrow N_2 \text{ハ} N_1 + \text{Cop-m}$

(例) 「私ガ理事ダ」 \longrightarrow 「理事ハ私ダ」⁽¹⁴⁾

述語ガV-, A-等の場合は後に〔T.21〕～〔T.23〕で示す名詞化の変形を経た後に「～ハ」

(14) 松下大郎「標準日本語法」はp. 336以下で「提示助辞」としての「は」についてこの事に言及している。

となるであろうが、この変形にはまだ明らかにしなければならぬ restriction があるので、ここでは大ざっぱに上例のみを掲げておく。

〔T.9〕 受身（直接受身）の表現を作る。

$$N_1 \text{ が } \dots N_2 \left\{ \begin{array}{l} \text{ヲ} \\ \text{ニ} \end{array} \right\} \dots \text{Vt-m (E.6, 7)} \longrightarrow N_2 \text{ が } N_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{ニ} \\ \text{カラ} \\ \text{ニヨッテ} \end{array} \right\} \dots \text{Vt-/(r)are/-m}$$

(例) 「彼が彼女ヲ koros-i-ta」→「彼女が彼ニ koros-are-ta.」

「共産党ガソノ案ニ賛成 s-i-nakatta」→「ソノ案が共産党ニ賛成 s-are-nakatta.」

〔T.10〕 $V \longrightarrow A$ (願望)

$$N_1 \text{ が } N_2 \text{ ヲ Vt-m} \longrightarrow (N_1 \text{ ハ}) N_2 \text{ が Vt'〔非完了・連〕+/ta/-m}$$

(例) 「私が時間ヲ買う」→「(私ハ) 時間が買イタイ」

先にも書いたように、「タイ」を単なる助動詞として片付けてしまうのではなく、それを V-に付けることによってその Predicate が形容詞的になること、だからこそ対格の「ヲ」が主格の「ガ」になることを明確にする。つまりこのことを syntactic に扱うことが必要だ、と考える。こういう事は他にも沢山あると思われる。

$$〔T.11〕 \left. \begin{array}{l} A \\ Na \end{array} \right\} \longrightarrow V \text{ (生成)}$$

$$N \text{ が } \left\{ \begin{array}{l} A-m \\ Na+Cop-m \end{array} \right\} \longrightarrow N \text{ が } \left. \begin{array}{l} A- \\ Na+Cop- \end{array} \right\} \{ \text{非完了・連} \} +/nar/-m$$

(例) 「空気が tumeta-i」→「空気が tumeta-ku-naru.」

「アタリガ sizuka-da」→「アタリガ sizuka-ni-naru」

ここで出てくる文型は、英語ならさしづめ「主語—V—補語」の形で、基本文型に入るべきものであろうが、日本語では「NガA」という基本文から生み出されるとした方が、基本文を出来るだけ簡単に、という目的にそうことになる。同じことは後の〔T.20〕についても言える。

〔T.12〕 対象（物）の主体化

日本語には、人が主体、事物が客体で、他動詞が使われている場合、主体たる人が、いわば背後にかくれて、事物それ自体の自発的な動作、現象、性質としてその事が描かれる特徴的な傾向がある。感覚的動詞の場合その代表的なものだが（「私達が富士山ヲ見ル」→「富士山が見エル」）、これを次のように定式化する。

$$N_1 \text{ (人) が } N_2 \text{ (物, 事) ヲ Vt-m} \longrightarrow N_2 \text{ が Vi-m}$$

(例) 「我々が妙ナ音ヲ聞ク」→「妙ナ音が聞エル」, 「君ガオ金ヲモウケルカ?」→「オ金ガモウカルカ」, 「誰カガ資金ヲ集メル」→「資金が集マル」, 「誰カガ砂金ヲミツケル」→「砂金ガミツカル」

これら Vt と Vi はかなり明瞭な形態的対応をされていていくつかに類別する事が出来る。又、省略される N₁ についての restriction を更にくわしく調べてみる必要がある。

〔T.13〕 疑問詞疑問文

$$\begin{array}{l} \text{.....N+P.....Predicate-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \longrightarrow \text{.....Nq+P.....Predicate-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} + \text{カ} \\ \left. \begin{array}{l} \text{Nq} \left\{ \begin{array}{l} \text{N} \rightarrow \text{人} \rightarrow \text{「ダレ」 「ドナタ」} \\ \text{N} \rightarrow \text{物, 事} \rightarrow \text{「ナニ」} \\ \text{N} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{コレ} \\ \text{ソレ} \\ \text{アレ} \end{array} \right\} \rightarrow \text{「ドレ」} \\ \text{N} \rightarrow \text{時} \rightarrow \text{「イツ」} \\ \text{N} \rightarrow \text{場所} \rightarrow \text{「ドコ」} \end{array} \right. \end{array} \right\}$$

(D) 文の Phrase 化 (Deformation)

〔T.14〕 敘述部の連体化

$$\text{Nガ.....} \begin{array}{l} \text{A-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \\ \text{V-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \end{array} \longrightarrow \text{...} \begin{array}{l} \text{A-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \\ \text{V-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \end{array} + \text{N}$$

(例) 「山肌が美シイ」→「美シイ山肌」

「火が消エタ」→「消エタ火」

日本語では「節」と「句」の定義がふつうはっきりしていないので、この T. と後の〔T.18〕「形容詞化した文の抱合」との区別は難しい。或いはこの項はすべて〔T.18〕に組み入れる方がよいかも知れない。述部がN又はNaの場合は、次のようになる。

$$\text{N}_1 \text{ガ} \text{N}_2 + \text{Cop-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \longrightarrow \text{N}_2 + \text{Cop-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} + \text{N}_1$$

但し左辺の Cop- につくのが〔非完了・直〕即ち/ダ/の時、右辺では/ノ/又は/デアル/となる。

(例) 「彼ガ社長ダ」→「社長ノ彼」 「ソノ話ガデマダッタ」→「デマダッタソノ話」

$$\text{Nガ} \text{Na} + \text{Cop-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} \longrightarrow \text{Na} + \text{Cop-} \left\{ \begin{array}{l} \text{直} \\ \text{推} \end{array} \right\} + \text{N} \quad (\text{但し左辺の Cop- に付くのが〔非完了・直〕即ち/ダ/の時、右辺では/ナ/となる})$$

(例) 「係員ガ親切ダ」→「親切ナ係員」, 「係員ガ親切ダッタ」→「親切ダッタ係員」

〔T.15〕 AのN化

NガA {非完了・直} →NノA-/sa/

(例) 「山肌が美シイ」→「山肌ノ美シサ」, 「愛ガ悲シイ」→「愛ノ悲シサ」

或種のA(上の第2例のような)は-/mi/がついて名詞になることがある。

〔T.16〕 VのN化

$$\left. \begin{array}{l} \text{Nガ} \\ \text{Nヲ} \end{array} \right\} \text{V- 非完了・直} \rightarrow \text{NノV- \{非完了・連\}}$$

(例) 「子供ガ喜ブ」→「子供ノ喜ビ」「儉約ヲ教エル」→「儉約ノ教エ」

これはAのN化と違ってV- {非完了・連} が名詞として使われるものは限られている。第I類のV(子音動詞)は比較的少ないようである。複合動詞になると圧倒的に多い。これらは音節の数と関係があると思われる。尚, 第III類「スル」はその前にある語(語幹)がはじめてからN的であるから「～スル」をとり去るだけでNとなる。(「研究スル」→「研究」) 複合名詞の研究と共に今後の課題の一つである。

(E) 複合変形 (Binary or Polynary T.)

2つ(或いはそれ以上)の文をもととする際, A文を変形してB文の中に組み入れる(つまりB文は母胎となる文, R. Leesの用語では‘Matrix Sentence’, となる)ような場合と, A, B2文がただ並列的に連結される場合とに分けられる。

「組み入れる」という場合でも, Harris の所謂 ‘Container’ というような場合は, まとめて整理の方が便利である。これについては後に述べる。

副詞(又, 人によっては接続詞)の「シカシ」, 「ダカラ」, 「ソコデ」等や接続助詞の「カラ」, 「ノデ」, 「ガ」, 「ケレドモ」等を使って2文を連結する場合は問題が別になるので, 紙面の都合で割愛する。ただ, これらを, ただ従来のように, 文と切りはなして眺めるだけでなく, 前の文の末部がどのような形をしているかによって接続語の意味が左右されることを看過すべきでない。

Modal suffix が2文連結の働きをもつのは日本語の特色である。主なものを少し挙げる。

〔T.17〕 並列的連結

$$\begin{array}{l} \text{-----Predicate}_1\text{-\{直\}-----} \\ \text{-----Predicate}_2\text{-----} \\ \text{-----} \rightarrow \text{-----Predicate}_1\text{-\{非完了・連\}-----} \text{-----} \text{Predicate}_2 \end{array}$$

(例) 「戦争が終ル」
「平和が来ル」
→「戦争が {終リ
終ッテ} 平和が来ル」

{非完了・連}でつなぐのは書き言葉的, {完了・連}でつなぐのは話し言葉的である, といえよう。尚 {完了・連} は, Predicate₁ が, 或いは2文が, 完了形である時に使われ易い。又, 並列的とはいっても, 例えば「〜テ」で接いだ場合, 意味は種々あり得る。(「ソレヲ知ッテオドロイタ」, 「知ッテイテ, イワナイ」など) 併しそれは「テ」のもつ意味 (lexical meaning) というよりは, 2文の並列的連結の際に見られる universal な現象のように思われる。(例えば英語の分詞構文など) 教育的には大切な問題であるが, ここではこれ以上立入らない。

〔T.18〕 条件 (仮定) と帰結

「……Predicate₁」
「……Predicate₂」
→「……Predicate₁-{条}…Predicate₂」

(例) 「風が吹ク」
「オケヤガモウカル」
→「風が吹ケバオケヤガモウカル」

{非完了・条} (即ち/(x)eba/, /kereba/, /nara/等) と {完了・条} (即ち/tara/, /kattara/, /dattara/等) 等の分布の違いは usage の興味ある問題であるが, syntactic にも, 何らかの方法で, (例えば連結するSの数を増して意味のズレを調べる) 定式化出来るのではないかと思う。

〔T.19〕 形容詞化した文の抱合 (文の連体化)

「……N₁……Predicate₁」
「……Predicate₂」
→「……Predicate₂{直推}+N₁……Predicate₁」

(但し “……Predicate₂” の中に, N₁と同じNが含まれておれば, そのNは消去される。
尚 “……Predicate₂” の中に「Nハ」があれば, それは「Nガ」又は「Nノ」と変る。又,
N₁の前の「ソノ」「コノ」「アノ」等は消去される事が多い)

「アノ映画ハ面白カッタ」
「私ハ昨日ソノ映画ヲ見タ」
→「私が昨日見た映画ハ面白カッタ。」

こうして見るとヨーロッパ語の関係節の構造と対応するように思われるけれども, 関係詞というものの無い日本語に於ては, base となるNが, それを修飾する関係 (又は連体) 節の中のどういう要素であるかは, 殆んど意識されない。

例えば,

「アノ姿ガ私ハ忘レラレナイ」
「母ハションボリ私ヲ見送ッテクレタ」

→「母ガションボリ私ヲ見送ッテクレタ姿ガ私ハ忘レラレナイ」

その他、「江戸カラ佐渡ノ金銀山ニ水替人足トシテ送り込マレル人数ハ年間ニ相当ナモノダッタ」「水替人足（ノ仕事）ハ坑内ノ水ヲ外ニ流シ出ス作業ダッタ」など例には事欠かない。つまりいってみれば、どんな文でも、どんなNをもただ前置することによって修飾することが出来るのであって両者の「関係」は極めて loose なものであるといえる。ヨーロッパ語では接続詞による文の連結に当たることが、日本語では所謂形式名詞を文が（連体）修飾している構造になっているのも、この点から了解が行く。

〔T.20〕 やや末梢的だが「～テイル」と対比される「～テアル」という構文を考えてみる。「～テイル」は、〔T.5〕で見たように、単一文に対する addition に過ぎないが、「～テアル」の方は、次のような2文がその背後にある。

$$\left[\begin{array}{l} \text{—N}_1 \text{ガアル} \\ \text{—N}_2 \text{ガN}_1 \text{ヲVt—} \end{array} \right] \quad \begin{array}{l} \text{（「車ガアル」）} \\ \text{（「誰カガ車ヲオク」）} \end{array}$$

→N₁ガVt-〔完了・連〕+aru/（「車ガ置イテアル」）

この場合「N₂ガ」は当面の関心事ではないので省略されている。この表現は、N₁が何らかの目的のために、既にVされ終って、準備が出来ているという感じを含んでいる。

最後に、Harris が 'Container' と名付けている特殊な文連結の類型に入ると思われる数例を挙げることにする。英語でいえば、「I know (that) +Sentence」の「I know (that)」のような部分を Container と呼ぶ。これは、(that)の後に入るのがどのような文でもあり得るのに対し、element が限定されており（例えば know と同じクラスの動詞）、又、それ自身は non-sentence である点が特徴で、これを色々な文を入れる容器と考えるわけである。

〔T.21〕 「働きかけ」

$$\left[\begin{array}{l} \text{—N}_1 \text{ガ……スル, カエル—} \\ \text{N}_2 \text{ガ} \left\{ \begin{array}{l} \text{N} \\ \text{Na—} \\ \text{A—} \end{array} \right\} + \text{Cop—} \end{array} \right] \rightarrow \text{N}_1 \text{ガN}_2 \text{ヲ} \left\{ \begin{array}{l} \text{N} \\ \text{Na—} \\ \text{A—} \end{array} \right\} \begin{array}{l} +/\text{ni}/ \\ +/\text{ku}/ \end{array} \left\{ \begin{array}{l} \text{スル} \\ \text{カエル} \end{array} \right.$$

(例) $\left[\begin{array}{l} \text{—私ガ……スル—} \\ \text{—彼ガ後継者ダ—} \end{array} \right] \rightarrow \text{私ガ彼ヲ後継者ニスル}$

〔T.22〕 文のNominalization(1)

$$\left[\begin{array}{l} \text{—N}_1 \text{ガ……V（認識のV）—} \\ \text{—Sentence—} \end{array} \right] \rightarrow \text{N}_1 \text{ガ Sentence} \left\{ \begin{array}{l} \text{コト} \\ \text{ノ} \end{array} \right\} \text{ヲ V}$$

但しV→「知ル, 信ジル, 了解スル……」

〔T.23〕 文の Nominalization (2)

$$\left[\begin{array}{l} \text{……ハ Predicate (判断を示す)} \\ \text{Sentence} \end{array} \right] \longrightarrow \text{Sentence} \left\{ \begin{array}{l} \text{コト} \\ \text{ノ} \end{array} \right\} \text{ハ Predicate}$$

Predicate → 「正シイ, 間違イダ……」

〔T.24〕 文の Nominalization (3)

$$\left[\begin{array}{l} \text{N}_1 \text{ガ……ヲ V (感覚のV)} \\ \text{Sentence} \end{array} \right] \longrightarrow \text{N}_1 \text{ガ (ハ) Sentence} + \text{「ノ」} + \text{「ヲ」 V}$$

(例) $\left[\begin{array}{l} \text{「私ガ見タ」} \\ \text{「誰カガ窓カラ入ッタ」} \end{array} \right] \longrightarrow \text{私ガ, 誰カガ窓カラ入ルノヲ見タ}$

V → 「見ル」, 「眺メル」, 「聞ク」……

以上の〔T.21〕～〔T.23〕に於て、組み入れられる Sentence の中に「Nハ」がある時は、その N と Predicate 又は他の名詞との関係によって、「Nガ, ノ, ニ, ヲ」のいずれかに変る。従来、「ハ」と「ガ」の違いが種々様々の見地から論じられてきたが、「ハ」が「ガ, ノ, ニ, ヲ」などの代りをする性質（三上氏の所謂「代行性」）は先の〔T.7〕で、又、「Nガ」が題目の提示で「Nハ」に変形した場合の、両者が内包する所の論理的な違いは〔T.8〕で示され、更に上記〔T.21〕～〔T.23〕では従属節の中では「～ハ」が避けられること、いい換えれば、複文での「～ハ」は常に文末の述語にかかって行くこと、が formulate されることになる。

〔T.25〕 引用

$$\left[\begin{array}{l} \text{Nガ……トイウ (Container)} \\ \text{Sentence} \end{array} \right] \longrightarrow \text{N}_{\text{ハ}}^{\text{ガ}} + \text{Sentence} + \text{ト言ウ}$$

V → 「言ウ」, 「叫ブ」, 「伝エル」……

（「思ウ」, 「信ジル」の類は他のグループに入れた方がよさそうである。）

〔T.26〕 使役

$$\left[\begin{array}{l} \text{N}_1 \text{ガ……}\{-\text{ase}-\infty-\text{sase}-\}-\text{m (Container)} \\ \text{N}_2 \text{ガ……V} \end{array} \right] \longrightarrow \text{N}_1 \text{ガ N}_2 \left\{ \begin{array}{l} \text{ニ} \\ \text{ヲ} \end{array} \right\} \text{V} - \left\{ \begin{array}{l} \text{ase} \\ \text{sase} \end{array} \right\} -\text{m}$$

(例) $\left[\begin{array}{l} \text{「彼ガ……}\{-\text{使役}-\}-\text{m} \\ \text{「彼女ガ ik} \end{array} \right] \longrightarrow \text{彼ガ彼女ヲ行k-ase-ru}$

〔T.27〕 間接的受身

$$\left[\begin{array}{l} \text{N}_1 \text{ガ……}\{-\text{are}-\infty-\text{rare}-\}-\text{m} \\ \text{N}_2 \text{ガ……V} \end{array} \right] \text{ (Container)}$$

$$\begin{array}{l} \longrightarrow N_1 \text{ が } N_2 \text{ ニ } \dots\dots V - \left\{ \begin{array}{l} \text{-are -} \\ \text{-rare-} \end{array} \right\} -m \\ \text{(例) } \left[\begin{array}{l} \text{「彼ガ}\dots\dots\{\text{受身}\}\text{」} \\ \text{「妻ガ死ヌ」} \end{array} \right] \longrightarrow \text{「彼ガ妻ニ死 n-are-ru.」} \end{array}$$

これは従来「被害の受身」又は「ハタ迷惑の受身」などと呼ばれて来たもので、日本語の特徴の一つである。これは〔T.9〕のふつうの受身（直接的受身）と異り、「彼ハ妻ニ死ナレタ」はあっても「妻ガ彼ヲ死ンダ」はないのである。所が従来、「日本語では自動詞でも受身になるから云々」という風に語形のものにしか眼を向けないため、〔T.9〕と〔T.26〕の Syntactic を相違が——佐久間博士の論文などがあるにも拘らず——充分ははっきりと一般には認識されなかった憾みがある。上の〔T.26〕に於て、「組み入れられる」Sentence 中のVは、別に自動詞であっても他動詞であっても差支えないのである。例えば、「誰カノ財布ガスリニ盗ラレタ」は直接受身（←スリガ誰カノ財布ヲ盗ッタ）, 「誰カガ財布ヲスリニ盗ラレタ」は間接受身である。（「スリガ誰カヲ盗ッタ」は無い。）

あ と が き

以上今回は極めて粗いスケッチに止まった。今後更に各ルールをディテールにわたって検討し、Sentence 間の形態的関連性の意味も考えて行きたい。又、例えば複合語の構造、「カラ」と「ノデ」、「(r)eba」と「tara」の違い、助詞の「係る力の差」、「ハ」と否定表現との関連など、上のような視点から考えるべき問題は無数にある。

(1965年10月)

参 考 文 献

- Bach, Emmon, *An Introduction to Transformational Grammars*. New York, 1964.
- Bloch, Bernard "Studies in Colloquial Japanese.II. Syntax". *Language*, 1946.
- 〃 〃 "Inflection" *Journal of American Oriental Society*. 1946.
- Chomsky, Noam *Syntactic Structures*, The Hague, 1957.
- 〃 〃 "A Transformational Approach to Syntax" *Third Texas Conference on Problems of Linguistic Analysis in English*, 1962.
- 〃 〃 *Aspects of the Theory of Syntax*, Mass., 1965.
- Jordan, Eleanor H., *The Syntax of Modern Colloquial Japanese*. (Language Supplement No.52.)
- 芳 賀 綏 「日本文法教室」1962.

- Harris, Zelig S., *Structural Linguistics*, Chicago, 1951.
- // // "Discourse Analysis" *Language*, 1952.
- // // "Co-occurrence and transformation in linguistic structure." *Language*, 1957.
- // // *String Analysis of Sentence Structure*. The Hague, 1962.
- // // *Papers in Formal Linguistics*, U. of Penna. 1957.
- 橋 本 進 吉 「国語学概論」1946.
- 服 部 四 郎 「言語学の方法」1960編
- 林 四郎 「文章構造とその図解法」講座現代語 6, 1964.
- // // 「基本文型の研究」1964.
- Hockett, Charles F., *A Course in Modern Linguistics*, New York, 1960.
- 金田一 春 彦 「日本語」1957
- 国立国語研究所編 「話し言葉の文型」(1), (2) 1960.
- 黒 田 成 幸 「言語の記述」1960.
- Lees, Robert B. *Grammar of English Nominalization*, Indiana Univ. 1960.
- 佐久間 鼎 「現代日本語の表現と語法」1951.
- 松 下 大三郎 「標準日本口語法」1930
- 三上 章 「現代語法序説」1959
- // // 「象ハ鼻ガ長イ」1960
- // // 「日本語の論理」1963
- // // 「日本語の構文」1963
- 三尾 砂 「話し言葉の文法」
- Nida, E.A., *Morphology*, 1946—61.
- 時 枝 誠 記 「国語学原論」
- Wells. Rulon S., "Immediate Constituents" *Language*, 1947.
- 「国語文法の問題点」講座現代語1964
- 「一步進んだ日本文法」国文学解釈と鑑賞1964.10
- 対照日本文法 (南崎晋編)